特 集

「都市の生物多様性指標」による基礎自治体の評価とその活用

Evaluation of municipalities by Cities' Biodiversity Index (CBI)

アオスジアゲハ，カブトムシ，シオカラトンボ，シジュウカラ，トノサマバッタ，ニホンアマガエル…このような生きものたちは，どこにでもいるわけではないが，街中でもたまに出会える生きものたちである。都市の生きものたちの実態や重要性は，ランドスケープ研究の論文や論説の中で，何度も形を変えて語られてきた。しかし，その重要性が広く市民にわかりやすく伝えられてきたのだろうか。「生物多様性」という言葉の認知度を見ても，必ずしも浸透していないことがわかる。街中の生きものたちは，絶滅危惧種というよりは普通種であることが多いし，貨幣価値などの市民にわかりやすい指標に換算することが難しい。

そうしたわかりにくさもあって，これまで，街中の生きものたちはその「価値」を社会の中で明確に認識されることが少なく，結果として，過去数十年の間に，身近な場所から姿を消してしまった。2010 年に名古屋市で開催された生物多様性条約第 10 回締約国会議（いわゆる CPO10）をきっかけに，民間開発でも都市の生きものたちが「都市の生物多様性」として再認識されるようになり，生きものに配慮した取り組みが行われるようになってきた。これらの取り組みを点から線，面へと展開していくには，地方公共団体を始めとする多様な主体の参画が必要である。

本特集は，都市の生物多様性の価値という課題に対して，指標を用いた評価や，その地方公共団体での展開を紹介するものである。ここから，さらに議論が広がっていくことを期待したい。

編集担当委員：一ノ瀬 友博